

Eureka VI

六年制通信 No. 27 平成 30 年 12 月 22 日(土) 号

シャーデンフロイデ

論語に「君子は人の美を成せども、人の悪を成さず。小人は是に反す」（顔淵第十二 294）とあります。『ポケット論語』によると、意味は「君子は、なるべく他人の美点・長所をのぼさせるようにはするが、他人の欠点・短所を大きくするようなことはしない。小人は、これと反対である」ということです。少しわかりにくいかもしれませんが、つまり、立派な人は他人の成功を願ってやれる、あるいは他人が何か失敗をした場合には心から心配してやれる、それと反対にくだらぬ人間は他人の成功をねたむ、嫉妬するということです。

しかし、これは非常に難しいことですね。嫉妬心の克服は、古来、最も困難なことだと言われていましたから。昔、ある高僧が晩年になって告白するに、自分は仏門に入って厳しい修行をし、様々な欲を克服してきたが、他の僧侶のいい噂を耳にしたときに自分の中に湧き起こるさざ波（嫉妬心のことですね）を抑えることだけは苦勞したと。生きていく上での生理的な欲求以上に、この嫉妬心というのは強いらしい。

ドイツにはシャーデンフロイデ (Schadenfreude) という言葉があります。シャーデンは「害する」「損なう」で、フロイデは「喜び」です。そこから、他人の失敗を見たときに「小気味よく思う気持ち」「いい気味だと思う」ことに使われます。要するに「ざまあみろ」という感じですね。日本でも「隣の芝生は青い」とか「他人の不幸は蜜の味」といういやらしい表現があります。上方落語でも「あたしゃ人が難儀してるのん見るの、ホンマ好きやねん」なんて、しょっちゅう出てきます。どうも、残念ながら人間にはそういうところがあるのかもしれないですね。孔子はこれを戒めているわけです。私達も君子たるべく、嫉妬心を克服したいものです。

嫉妬する場合、普通は対象がはっきりしています。自分よりも優れた人や恵まれた人に、あるいは何か自分の欲しいものをすでに手に入れた人に、私達は嫉妬します。しかし嫉妬心というものは、もっと普段の言動の、それが嫉妬心から発するとは気づかない、心理の底流に流れていることもあるらしい。これが何の本で読んだのか忘れたのですが、昔校内暴力が流行った(?) ことがあって、その時暴れている子どもの心理には、実は嫉妬心があるのだというのです。当時は、若者の社会に対する不満の表れなどと言われていましたが、そうではなくて、自分以外の優れた者に対する嫉妬なのだ。面白いと思いました。そうかもしれないと思いました。

私は、例えば学校で物を壊したりする生徒は、その親が、子どもが男の子ならその父親が、学校や教師に敬意を持っていないからだと思っています。そして、その父親

もまた、心に何らかの嫉妬心を抱えて大人になったのだと解釈しています。子どもの教育には、子どものいる環境に対する敬意を、周りの大人は持たないといけませんね。

では嫉妬しないためにはどうすればいいのでしょうか。一つだけ、恐らくこれだけは正しいのではないかと考えられるのは「現実をちゃんと見る」ことだと思います。つまり「現実には常に正しい」と思うことです。これは、現状に満足せよ、という意味ではありませんよ。嫉妬するということは、相手が優れていることを自覚しているということです。そこを、ちゃんと見る。その現実には正しいとはっきり認識する。もし、その人を嫉妬心に駆られて攻撃すれば、その行為は自分をその人のレベルまで引き上げてくれることは決してなく、その人を自分のレベルにまで引き落とそうとしている卑しい行為だと認識すること。そういう訓練が必要だと思います。

冬休みのおすすめ

・稲垣美晴 『フィンランド語は猫の言葉』（講談社文庫）

稲垣さんは東京藝大の学生の時、美術の関係からフィンランドに興味を持たれ、そのまま留学されるのですが、そこからのフィンランド語との格闘をこの本で書いています。森とサウナとジャガイモの国の言語は、英語やドイツ語などが属する言語とは違うため日本人にはほとんど未知の言語です。どうして猫の言葉なのかといえば私たちが「へえ」とか「ふむふむ」とか合いづちを打つときね、かの言語では「ニーン」「ニーン」と言うそうなの。そうするとあちこちで「ニーン」「ニーン」「ニーン」となるわけですよ。どっかに猫でもいるのか、と感じたのだそうです。

この本をよく読むと、彼女の刻苦勉励ぶりが読み取れます。ムーミンの国という印象しか持っていない私たちにも、フィンランドのことが少しは理解できます。何より、とっても面白く読めました。

・藤原正彦 『天才の栄光と挫折』（文春文庫）

昔、NHKの人間大学で使われたテキストをもとに書かれた本です。関孝和、ハミルトン、ラマヌジャンからワイルズに至るまで9名の数学者の功績と波乱の人生を追っています。私には大変面白かった。1600年代に世界に誇る数学者が日本にいたということも誇らしいことですね。私は個人的にはラマヌジャンとハミルトンの章が印象的でした。天才は長く生きられないのか、なぜああいう最期を遂げるのか。また、天才を生み出す土壌として、美しい自然など美的空間が必要であるとの著者の指摘も興味深いものでした。

・アレクシス・カレル 『ルルドへの旅・祈り』（春秋社）

知る人ぞ知る名著。これが文庫になっていないのが不思議で仕方がない。フランスのルルドに聖母マリアが現れ、その指示する所を掘ると泉が湧いたのです。その泉に浸かると難病の患者が治ると言われています。ルルドの泉として有名になり、今なお世界中から人が訪れます。医者である著者のカレルは、自分の判断では到底助からないと診断した患者を連れてルルドに向かいます。そこで、泉に浸けたとたん奇跡が起こるのを見た、そのことを書いた本です。カレルは1912年にノーベル生理学・医学賞を受賞した科学者です。その科学者が科学で説明できない現象を見たわけ。興味のある人は読んでみて下さい。ただ、新刊では見つけれられないかもしれません。ちなみに、私はルルドの泉の水をほんの少しだけ持っています。

BGMは太田裕美の 木綿のハンカチーフ でした…。